

Abstract

遺伝子組換え活性型第VII因子製剤を用いての偽腫瘍摘出：インヒビターを有する血友病 A 症例

Excision of pseudotumour in a patient with haemophilia A and inhibitor managed with recombinant factor VIIa

H. Takedani, S. Mikami, N. Kawasaki, Y. Abe, M. Arai, H. Naka and A. Yoshioka

我々は、第VIII因子（FVIII）インヒビターを有する血友病A患者において、左大腿部大型偽腫瘍の摘出術を行った。2時間ごとの遺伝子組換え活性型第VII因子（rFVIIa）製剤ボラス投与および抗線溶療法

により止血に成功し、偽腫瘍を摘出した。その後、投与間隔を徐々に8時間まで延長し、合計18日間投与した。術後8日目に自然出血が認められたが、投与間隔を短縮することにより止血した。有害事象は認められなかった。

Haemophilia (2004), 10, 179–182
© Blackwell Publishing Ltd.

Abstract: C. Barro, et al.

Abstract

症例報告

5か月の乳児における重篤な外科的肝臓出血に対する遺伝子組換え活性型第VII因子製剤使用成功例

Case report

Successful use of recombinant factor VIIa for severe surgical liver bleeding in a 5 month-old baby

C. Barro, I. Wroblewski, C. Piolat, M. Cartal, J.-F. Dyon, C. Jacquier, P. Andrini, B. Polack and G. Pernod

肝芽腫をもつ5か月の乳児において広範な肝生検術を行った後、腹腔内出血が発生した。拡大肝切除

術施行後に遺伝子組換え活性型第VII因子（rFVIIa）製剤の単回輸注により、この致死的出血は速やかに回避された。

Haemophilia (2004), 10, 183–185
© Blackwell Publishing Ltd.

Abstract: E. N. Libby and G. C. White II

Abstract

症例報告

血友病における頭蓋偽腫瘍

Case report

Cranial Pseudotumour in Haemophilia

E. N. Libby and G. C. White II

血友病における頭蓋偽腫瘍の報告は稀で、PUBMEDおよびMEDLINEで検索したところ、これまでに3例が報告されているのみであった。今回我々は、この合併症を生じた4症例目について報告する。

Haemophilia (2004), 10, 186–188
© Blackwell Publishing Ltd.